



## 「エコ川柳」

福岡義隆 著

葉文館出版, 1999年,

147頁, 1600円 (本体価格)

もうかれこれ二昔以上前のまだ世間の関心が地球環境問題に余り及んでいなかった時代に, 著者は『環境と地学——大気と水と土』(1977年, 森北出版), 『図説・環境地理』(1981年初版<1997年新装版>, 古今書院)を相次いで出版した。それ以来, 気候と環境の橋渡しの研究を続ける傍ら, 幅広い見識を基礎として, したため続けてきたのが川柳である。

環境問題を題材とした川柳を「エコ川柳」と著者は名づけた。陸月, 如月, 弥生, …, 師走と月ごとに四季折々の句を披露しつつ, その背景を巧みに解説・展開させる。思い描く世界を5・7・5のわずか17文字に込めて凝縮させる喜びは, 何ともいえない快感なのだろう。

身近な出来事を, 川柳というきわめて明快な手段で料理する。開発とともに環境汚染が進行する歪を抱えた現代社会にあって, 本書は人生の機微に触れつつ, 潤いを与えてくれる。現実には倦み疲れたときや, 壁にぶつかり発想転換を図りたいときなど, きっと何かきっかけを与えてくれるであろう。

還暦を迎え21世紀に向けて「柳風」を磨く意欲に溢れる著者こそ, 環境問題の改善をアピールする頼もしい旗手といえよう。

本書には力作の数々が(他者の作品も加えて)披露されている。ここで, 評者の選ばせていただいた5句を紹介しよう。

- ① 温暖化 体内時計を 狂わせる
- ② カタツムリ 七公害を 避けて住み
- ③ 開発が 自分史の舞台 消して行く
- ④ 楽あれば 苦ありを思い 省資源
- ⑤ 晴予測 それでも予報士 傘を持ち

いずれも長年, 気候学と環境科学の融合にパイオニア的役割を果たしてきた著者ならではの, 含蓄のある作品といえる。地球環境変動の生物界への微妙な影響を捉えた①には, 変容する季節感への危機意識が提示

されている。けなげに生きる小さな生命を横暴な人々と対比させた②では, 鋭い感性の片鱗に触れることができる。③には誰もが過去を振り返るとき脳裏によぎる世の中の移ろいが端的に表現されている。そして, ④を読んで当方は, 環境と健康の一举両得を考えて, ちょっと我慢してエレベーターやエスカレーターを使わずに階段を登ることにした。著者の推奨する通り「一人の百歩より, 百人の一步」が地球を救う。⑤は解説いらず。これらのさりと詠まれたユーモアたっぷりの句から, 著者の自然・環境への深い想いを感じることが出来る。

もっとも印象に残ったエピソードは, 「大学時代, やや無味乾燥に思えた物理の授業で, 教授が講義の最初に必ずその日の通勤途上で詠んだという短歌を板書していた……自分もいつかそんな先生になりたいという気持ちもあった」というくだり。その教授の人間味あふれる意外な一面が, 若き日の著者に強烈なインパクトを与えたのであろう。学生時代に遭遇する人生の師にはいろいろなタイプがあるものだ。

付章では「エコ川柳教室の実践記録」と題し, 川柳のルールや型が詳しく述べられている。とくに「初心者のための20戒」は核心をなす部分である。重要なところなのでいくつか紹介すると, 川柳の3要素——うがち, 滑稽, 軽み——を守ること/誰にでも分かるが誰にでも作れない句を作る/句に深さ, 幅, 立体感を持たせるようにする…など勘所となる意味深い規則が列挙されている。基本に従いさえすれば, あとは自由に誰でも作風を工夫できるともいえるわけだが, 熟達するには並々ならぬ努力と歳月を要することであろう。

読者の多くは本書を読み進むうちに, 川柳のおもしろさに引き込まれ, 自ら作ってみたいと思うことだろう。向井千秋さんは宇宙で短歌を詠んだ。宇宙はロマンと遊び心をくすぐるところである。啓発された評者も, はずかしながら一句。

エンデバー 地球を読んで 新発見

エンデバーが読み取ったデータのなかに副産物として思いがけない画期的な成果がきつと隠されているに違いない。

「エコ川柳」には環境を大局的に見据え, 自然観の真髓に迫る魔術が秘められているのかもしれない。

(日本大学文理学部地球システム科学科 山川修治)